■解答乱麻■

地域の〝つながり格差〟に知恵を

参院議員　山谷えり子

6月18日は父の日。学校によっては父親参観日を行ったり、企業のほうも親の仕事ぶりを見学できる機会を作るところもあるようで、お互いに教育や職場の環境を体感し合うことは、近年ますます必要なこととなっているように思う。

もう20年ほども前のことになるが、3児の母として私は公立小学校のPTA会長と東京都世田谷区の教育委員を務めたことがある。お引き受けしたからにはと、お父さんや地域の人々の参加によって教育環境をダイナミックにしたいと、得意技やできることを聞いて回った。するとさまざまな協力志願やアイデアが出るわ出るわで、地域の方々の子供たちへの思いがこんなにも熱いのかと感動した。

さっそく、いろいろ実行に移していったのだが、例えば校庭にテントを張ってのキャンプや、近所の銭湯で体の洗い方やマナーの勉強、災害時もたくましくと、日付を越えてのオーバーナイトウオーク、各種スポーツの指導など、〝どの子もわが子〟のスローガンのもと、大親爺ぶりを発揮してくださった。区内の64の小学校ではつながりを作るため、定期的にアイデア交換会も行った。公共施設だけでなく、寺社や専門学校、店舗など随所で主となる人や場所がつながったのも豊かな体験であった。

昨今は、当時より少子化や子供の貧困、家族の多様化、孤立化が進んでいる。教育における〝貧困と格差〟の問題は政治的課題となっているが、子供たちにとって成長期の〝体験と情愛の格差〟は人格形成に決定的影響がある。貧困問題を論じるならば、同時に〝つながり格差〟にも焦点をあてなければならないと思う。

というわけで、公立学校の使命として、地域全体がビッグファミリーとなるような働きかけを強めることが以前より必要となっており、そのためにも男性、父性の出番が期待される。国会では学校への人々のさらなる参加貢献を目指し〝チーム学校運営推進法案〟成立に向けての動きが活発となっている。

平成27年の国勢調査によると、30代前半で未婚の男性は約47％、40代前半では30％と未婚化は進む一方である。父性の出番は独身男性にとっても刺激的な〝喝〟となって、家族を作る意欲の目醒めにもつながっていくような気がする。

私の父（山谷親平）は戦後、政治部記者、そして日本初のパーソナリティーとして「絶望は愚か者の結論なり」「苦しい時ヤセ我慢できる人間は上等」「ヤマもタニもあるがシンパイするな」と放送電波で話していたが、家庭でもユーモアとヤセ我慢、〝良き隣人となれ〟と語る思いやりのある人であった。62歳で亡くなった時、傷痍軍人として弾の破片があちこち残ったままの体を母がさすりながら、「パパは家族にも気を使うような人だったわねぇ。あの世ではもう気を使わずにすむのかしら」とつぶやいていたことは今も忘れられない。

2030年代にはAI（人工知能）やITの発達で、現在存在する仕事の半分はなくなるのではないかという予測もある。かつてないほどの変化時代だからこそ、父親の姿勢や言葉は子の心に苦しい時のつっかい棒として残ることだろう。さまざまな事情で父親不在の家庭もあるが、だからこそ、社会の中で父性的なものの存在に光をあて続けていくことは、社会と人生を深くしていくこととなる。

消費社会にあっては〝軽やかで幸せいっぱい〟なムード作りに過剰に熱心になりがちだが、奮闘、ヤセ我慢する生き方もまた美しい。ではないだろうか。

〈やまたに・えりこ〉サンケイリビング新聞編集長、国務大臣（国家公安委員長・拉致問題担当相）など歴任。1男2女の母。